

主 題：預言と異言

聖書箇所：コリント人への手紙第一 14章1-25節

「あなたがたは、よりすぐれた賜物を熱心に求めなさい。また私は、さらにまさる道を示してあげましょう。」、これがパウロがIコリント12章の最後に記したメッセージでした。「さらにまさる道を」と彼が言ったことは13章に書かれていた「愛」でした。パウロは13章で愛がどれほど優れているのかを私たちに教えてくれました。14章は「愛を追い求めなさい。」ということばで始まっています。これは神からの命令でしかも現在形を使っています。つまり、あなたは愛を追い求め続けていきなさいとそのように命じているのです。継続して熱心に執拗に追い求め続けること、それがいかに大切であるかをパウロは読者たちに教えるのです。最も大切な戒めは何でしたか？「神を愛すること」、二つ目は「隣人を愛すること」でした。神が教えていることは、私たちにとって最も大切なことは「神を愛し続けること」と「隣人を愛し続けること」です。

「神を愛する人とは主のみことばを実践する人」です。みことばには主のみこころが記されているからそれに喜んで従おうとする人たちです。間違いなく、あなたはそのように生きておられるでしょう。失敗をしながらも主の助けを仰ぎながら、みことばの実践に励んでいこうとします。失敗したときにはそれを告白してまた主に従っていこうとします。私たちはそのようにして生きるのです。

また、隣人を愛するとはことばだけで「愛する」と言うのではなく、愛の神がどのようなお方かを行いをもって明らかにしていきます。私たちは自分を人々の前に誇るために生きているのではありません。私たちの神を誇り、その方のすばらしさを人々の前で明らかにするために生きているのです。「愛を追い求めなさい。」と、神を愛する者として隣人を愛する者として歩み続けていくのです。

Iコリント14:1はこのように続きます。「また、御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。」と。愛を求めることを教えたパウロは、今度は同じように熱心にあなたがたが求めるべきものがあると教えます。それは「御霊の賜物」、言い換えれば「霊的賜物」ということです。イエスを信じたときに神が与えてくださるもの、イエスを信じるすべての人に与えられている賜物のことです。その賜物の中で敢えてパウロは「預言」ということを強調しています。この後見ていきますが「預言の重要さ」についてパウロは教えています。しかも、パウロは「異言」と「預言」を比較しながら教えるのです。なぜなら、コリントの人たちは異言を重要視していたからです。何か特別の賜物であると彼らは思うのです。そこでパウロは「異言よりもはるかにすばらしいものがある」と教えるのです。

今日のテキスト、Iコリント14章を見ていきましょう。

A. 預言が異言に優る理由 1-5節

1. 異言の問題点 2節

なぜ、預言が異言に比べて優っているのか？そのことを教えるのです。結論を言います。預言は愛と同じように「人々の霊的成長を助けるもの」だからです。聖書には「教会の徳を高める」と書かれています。だから預言の方が大切だと言うのです。そして、その説明がこの後に記されています。2節を見てください。「異言を話す者は、人に話すのではなく、神に話すのです。というのは、だれも聞いていないのに、自分の霊で奥義を話すからです。」とあります。「だれも聞いていないのに、」とはだれかが異言を話しているのに周りにだれもいないということではなく、この「聞いていない」というのは確かにメッセージを聞くという意味がありますが「理解する」という意味です。

ですからパウロは、異言を語ったとしても解き明かしがなければ何を話しているのか聞いている人は分からないと言ったのです。これがずっと後まで続いていきます。パウロは同じことを繰り返すのです。では、何を言っているのか分からないならそこに信仰の成長を見ることはできない、異言は助けにはならないと言います。だから、パウロは異言が助けにならないのだから、プラスになる預言の方がはるかに優れていると言うのです。同じメッセージが繰り返されていると言いましたが、パウロが繰り返して教えることは「与えられた霊的賜物は自分のために用いるものではない」ということです。人々のために、人々の成長のために用いなさいと、そのことをパウロはこれまでも教えて来たとし、この14章でも繰り返して教えるのです。

さて、異言の問題点ですが、2節にあったように「自分の霊で奥義を話すからです。」ということ。なぜ、「人に話すのではなく、神に話すのです。」と言ったのでしょうか？要するに異言の解説がなければ人にとって何の益にもならないからです。自分の霊で奥義を話すからだれも理解できないと言うのです。

「奥義」とは皆さんお分かりですね。神の啓示、神が明らかにされた真理のことです。「自分の霊で」と

ありますが、この霊は「聖霊なる神」のことでしょうか？2017年版の新改訳聖書ではこの箇所は「異言で語る人は、人々に向かって語るのではなく、神に向かって語ります。だれも理解できませんが、御霊によって奥義を語るのです。」と「御霊」と訳しています。今見ている第2版は「自分の霊」と訳されています。

恐らく、ここでは「自分の霊で」と言わんとしたのでしょうか。なぜなら、ここでパウロが言いたいことは「理解できない」ということです。もし、聖霊なる神が介入されているなら、その神が当然理解を助けるはずだからです。でも、「人の霊」で語っている以上、そこには限界があるのです。だれも理解できない、それは「自分の霊で奥義を話しているから」、だから、そこに限界があるとパウロは言うのです。

異言が語られるときには必ずだれかがその解説をすることが必要だとパウロは言います。だからこの2節で、異言を話す者が人に話すのなら聞いている人はだれも分からないから「神に話すのです。」と言ったのです。神には分かるからです。だから、問題点は「神の霊ではなく人間の霊で啓示を話そうとする」、だから限界があるということです。

2. 預言の優れたところ 3-5節

3節からは異言と対比して「預言」のことを言います。3節「ところが預言する者は、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えるために、人に向かって話します。」と。パウロが言いたいことは、異言は神に向かって話すけれど、預言は人に向かって話す、なぜなら、預言は人に理解されるからということ。そこで、パウロは「なぜ、預言が優れているのか？」について三つのことを挙げています。

1) 徳を高めるから : 新約聖書中に18回出て来ますが、「家」と「建てる」ということばでできていることばです。「徳を高める」とはまさに家を建てていくようなものだと言うのです。これなら聞いている人によく分かります。家を建てるときは先ず土台をしっかりと据えてその上に建物を建てていきます。まさに、信仰はそういうものだとパウロは教えるのです。ですから、ローマ書14:19「そういうわけですから、私たちは、平和に役立つことと、お互いの霊的成長に役立つことを追い求めましょう。」とあるように「霊的成長に」おいてしっかりと建て上げられていく、お互いに助け合っていくのです。

使徒の働き20章にはこのことばの動詞形がありそれは新約聖書中に40回出て来ます。20:32「いま私は、あなたがたを神とその恵みのみことばとにゆだねます。みことばは、あなたがたを育成し、すべての聖なるものとされた人々の中にあって御国を継がせることができるのです。」、「育成し、」ということばに訳されています。それがこの預言の為すわざだと言うのです。預言はそれを聞いている者たちを「育成する」、預言はそれぞれの信仰の成長に役立つということ。確かにそうです。神のみことばによって私たちは成長するのです。

2) 勧めを為す : 新約聖書中に29回出て来ます。「励ます、勧告する、忠告する」という意味で、人々に勧め、また、励ましをもたらすものだということ。この「勧める」ということばは「傍らに呼ぶ」という動詞から派生しています。この名詞は「傍らに呼ぶ」という動詞からの派生です。

もう一つ、この動詞から派生した名詞があります。それは「パラクレトス」というギリシャ語で、恐らく皆さんの中には知っているという方もおられるはずです。新約聖書中に5回出て来ていますが、イエスが「わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。…」(ヨハネ14:16)と言われたとき、「もうひとりの助け主」とは聖霊なる神のこと。そこには「援助のためにそばに呼ばれた者」と説明されています。

ですから、この「勧める」ということばをもう一度振り返ってみると、これはだれかを傍らに呼ぶのです。何のために呼ぶのか？励ますため、ときに、勧告をするために、忠告をするためにです。

3) 慰めを与える : このことばはこの14:3にしか出て来ていません。ここだけです。「元気づける」ということばです。預言、つまり、神の真理を語るときにどのようなわざが為されるのか？神の真理によってそれを学ぶ者たちの信仰が成長する、励ましを受けるということ。ときには、自らの歩みの正しくないところを示されたりします。そして、神の真理は聞いている者たちに助けをもたらす、慰めを与えると言うのです。

確かに、皆さんもこれまでの信仰生活の中で、みことばを読んでいて大変な励ましを受けたことがあると思います。旧約聖書を読んでいると信仰の勇者たちが出て来ます。その人の信仰に触れたときにあなたの心は励まされませんか？パウロが言います。ローマ15:4-5「4 昔書かれたものは、すべて私たちを教えるために書かれたのです。それは、聖書の与える忍耐と励ましによって、希望を持たせるためなのです。:5 どうか、忍耐と励ましの神が、あなたがたを、キリスト・イエスにふさわしく、互いに同じ思いを持つようになさいますように。」と。みことばによって私たちは励ましを得るのです。この信仰者がこのように主を信頼して生きた、その信仰者を神はこのように扱ってくださった、その信仰の模範が私たちに大きな励ましをもたらしてくれるのです。私たちもそのように生きていきたいと。

また、神の真理のメッセージは私たちの心を慰めます。言いようのない神の慰めによって私たちの心が満たされることを経験されたことがあると思います。Ⅱコリント1:3-4をご覧ください。大切な

ことが書かれています。「3 私たちの主イエス・キリストの父なる神、慈愛の父、すべての慰めの神がほめたえられますように。」と、これがあなたの神のことです。慈愛に満ち溢れあなたに慰めを与えることができるお方です。ですから4節に「4 神は、どのような苦しみのときにも、私たちが慰めてくださいます。」とあり「アーメン」と言います。言いようもない神ご自身からの慰めによって私たちの心が平安に満たされたり、感謝に溢れたり、希望に満ちたりと、そんな経験はありませんか？神が私たちのうちに働いてくださるのです。

質問しますが、だれがこのような働きを為してくさるのですか？神です。神が私たちが慰めてくださるのです。あなたですよ！ 神以外のところに慰めを求めようとしていませんか？神だけで十分ではないですか！私たちの心をだれよりも分かってくさっている方、その方が慰めをくださる、だから、言います。「こうして、私たちも、自分自身が神から受ける慰めによって、どのような苦しみの中にいる人をも慰めることができるのです。」と。

ですから、こうして見たときに私たちが教えられていることは、神はみことばを通して私たちのうちを励ましてくれたり、また、私たちに慰めをくださるということです。だから、神の真理を語る預言がいかにか大切かということが分かります。たとえば、皆さんの優しいことばで慰めることはできるでしょう。でも、私たちに必要なのは神の真理です。問題を見るととき私たちの心は騒ぎます。心がぐらつきます。問題によって私たちの心は不安に陥ってしまいます。私たちが見なければいけないのはその背後におられる絶対者なる神です。支配者なる神を見るとときその神が私たちに希望をくださるのです。この方に信頼するとき、私たちの心を神は慰めてくださり励ましてくださり、私たちが力を付けてくださる。そうして私たちは生きるのです。そのためにこの預言がいかにか必要であるかということパウロは教えるのです。

4節「異言を話す者は自分の徳を高めませんが、預言する者は教会の徳を高めます。」、異言で語ってもそれは教会全体の徳を高めませんが、預言で話すときは自分だけでなく教会全体の霊的成長をもたらす、だから、預言が大切だと言うのです。5節にも「私はあなたがたがみな異言を話すことを望んでいますが、それよりも、あなたがたが預言することを望みます。もし異言を話す者がその解き明かしをして教会の徳を高めるのでないなら、異言を語る者よりも、預言する者のほうがまさっています。」とあります。パウロは神がもしコリント教会の全員に異言の賜物を与えたとしたら、それはすばらしいことだと言います。しかし、預言の賜物の方がはるかにすばらしいと彼は繰り返します。異言を話したとしてもその内容が分からなければ、教会全体の成長には役立たない。でも、預言は聞いている人たちひとり一人のうちに主のみわざを期待することができますと言うのです。問題は、教会の徳を高めるものなのかどうかです。個人なのか全体なのかです。

今、パウロは預言が異言に優っていると来て来たのですが、その上で、異言が逆説的に預言に対して劣っているところを教えてください。

B. 異言が預言に劣る理由 6-19節

1. 異言は意味不明だから 6-12節

6節「ですから、兄弟たち。私があなたがたのところへ行って異言を話すとしても、黙示や知識や預言や教えなどによって話さないなら、あなたがたに何の益となるでしょう。」、異言が預言に比べて劣っているのは、まず異言は「意味不明」だからと言います。パウロがたとえコリントの教会で異言で話したとしても、それは彼らにとって何の益にもならないということです。その異言が彼らにとって益となるためには「黙示や知識や預言や教えなどによって」話すことが必要だと言うのです。「黙示」とは何でしょう？辞書によれば「救いに関する真理を明らかにする教え、啓示」という意味です。神からの啓示です。神が人々に教えたいとするその真理を明らかにする、それが「啓示」です。私たちが一生懸命知ろうと努力しても人間の力では無理です。神が明らかにしようとしたから私たちは神の真理を知ることになったのです。

ここでは確かに「黙示」と書かれています。同じことを言っています。神が明らかにされた真理のことです。その真理によって私たちは知識を得ます。私たちが知るべきことを知っていくのです。それを知るによって今度はそれを語っていきます。「預言」とあります。預言はその真理を明らかにしていくのです。人々に伝えていくのです。同時に、私たちはその真理を教えます。

こうすることによって人々の信仰は成長していくのです。ですから、パウロがコリントの教会にやって来て異言を語っても全く益にならない、みな成長に役立たない。なぜなら、真理である神からの啓示を教えられそれを通して彼らは真理を知って知識を得て、そして、彼ら自身が真理を語り真理を教える者になって彼らは成長していく、それでこそ彼らの益となるものであるということです。こうしてパウロは預言と異言の比較をするのです。

もちろん、見て来たように、預言を、つまり、神の真理を語る時、その人たちの責任は神の真理を正確に語るということです。これは牧師や教師などに限定されているのではなく、皆さんひとり一人においても同じことが言えます。「私はこのように思います」とそのように語る信仰者であるなら、そ

う信仰者から「神はこのように言われている」と神の真理を語る信仰者へと成長することです。これは語る者の責任です。では同時に、メッセージを聞く者の責任もあります。どのような心をもって神のメッセージを聞くのか？です

・**主のみことばを聞きたいという願い** : たとえば、礼拝に出席することが目的なら神のことばが語られていても余り注意を払っていないかもしれません。まず、私たちは聞く態度が大切です。神が語ってくださるのです。当然、私たちは緊張感をもって「神が語ってくださっている」と聞くのです。私たちが驚くことは神は私たちに語るだけでなく、私たちの心をご覧になっておられることです。どんな心で聞いているか？です。そのためのアドバイスとして皆さんが覚えておかれるといい聖書の箇所があります。多分、皆さんは実践されているでしょう。エリという祭司がサムエルという少年に語った時のことです。神がサムエルに語っておられることを知ったエリはこのようにアドバイスします。Ⅰサムエル3：9、10「9 それで、エリはサムエルに言った。「行って、おやすみ。今度呼ばれたら、『【主】よ。お話しください。しもべは聞いております』と申し上げなさい。」サムエルは行って、自分の所で寝た。10 そのうちに【主】が来られ、そばに立って、これまでと同じように、「サムエル。サムエル」と呼ばれた。サムエルは、「お話しください。しもべは聞いております」と申し上げた。」、この態度です。「神さま、どうか私に語ってください。あなたの真理を正しく理解できるように」と。正しい聞く態度をもって主のみことばに向き合うことが必要です。

・**神のことばが語られている!** : もし、皆さんが — もちろん、私たちはそれを目で見ることが出来ませんが、— 神が直接あなたに語っておられるとするなら、もし、神がこの場にお立ちになってメッセージを語っておられるとするなら、私たちはどのようにそのことばを聞きますか？

私自身の告白ですが、教会に通い始めた頃、信仰を得て1年位経っていたでしょうか、私には日曜礼拝は休息の場でした。その場では寝るのです。なぜなら、最初の5分メッセージを聞いたら今日のメッセージが分かるからです。なぜ寝るのか？礼拝の後に奉仕があるからです。そのために体力を温存しなければいけないからです。多くの人が寝ていました。でも、それがいかに神に対する罪なのか、神を礼拝するために来ているのに、どんな態度で神を崇めているのか？です。

テサロニケ教会の人たちはすごかったです。パウロはこう言います。Ⅰテサロニケ2：13「こういうわけで、私たちとしてもまた、絶えず神に感謝しています。あなたがたは、私たちから神の使信のことばを受けたとき、それを人間のことばとしてではなく、事実どおりに神のことばとして受け入れてくれたからです。この神のことばは、信じているあなたがたのうちに働いているのです。」と。皆さん、みことばを聞くときに、聖書が開かれて聖書のことばが語られるときに「神は私に語ってくださっている」と、そんな思いをもってみことばを聞いておられますか？テサロニケ教会ではそうだったのです。この聖書という書物は神のメッセージです。みことばが開かれたときに私たちはそのような態度をもってみことばを聞こうとしているかどうかです。ですから、語る者の責任も大切ですが、聞く者の責任もあるということです。

パウロはこの真理を伝えることについて三つのたとえをもって話を進めていきます。7節からご覧ください。一つ目は「楽器」、二つ目は「軍隊のラッパ」、ビューグルと言われるものです。そして、三つ目は「会話」です。

1) **楽器 7節** : 「笛や琴などののちのない楽器でも、はっきりした音を出さなければ、何を吹いているのか、何をひいているのか、どうしてわかりましょう。」、音符通りにひかなければ何の曲か分からない。音が外れているからです。

2) **戦闘用ラッパ 8節** : 「また、ラッパがもし、はっきりしない音を出したら、だれが戦闘の準備をするでしょう。」と。はっきりした音を出さなければ、突撃の命令なのか起床の命令なのか食事の命令なのか、消灯の命令なのかが分からないということです。

言いたいことは分かりますね。それが楽器でもラッパでもはっきりメッセージが伝わらなければ意味がないということです。

3) **会話 9節** : 「それと同じように、あなたがたも、舌で明瞭なことばを語るものでなければ、言っている事をどうして知ってもらえるでしょう。それは空気に向かって話しているのです。」、日本では地方に行ったときに全くことばが分からないということは余りありませんね。確かに、面白おかしく方言を使って「分からないでしょう!」と言われることがあったとしても…。

私は以前、ロンドンでスポルジョンの教会を訪問したとき、そこで会議があって、イギリスの先生方が話される内容は問題なかったのですが、ある一人の先生はウエールズの方でその方が立って話された時、私は9割以上何を話されているのか分かりませんでした。それで隣にいたイギリスの方に「言っている内容は分かりますか?」と尋ねると私の顔を見て「分からない!」と言われました。そのような経験をするとあります。でも、言いたいことははっきりしています。もし、会話をするなら、語っていることが聞いている人に全く分からなければどんな益があるのか?ということです。そのような

ことが聞いている人を成長させることができるか？です。

ですから、10節からこのように書かれています。「10 世界にはおそらく非常に多くの種類のことばがあるでしょうが、意味のないことばなど一つもありません。11 それで、もし私がそのことばの意味を知らないなら、私はそれを話す人にとって異国人であり、それを話す人も私にとって異国人です。」、パウロはここで今まで語ってきた異言がいったい何であるかを明らかにしています。異言は「この世の言語、ことば」のことです。神秘的で意味不明のことばらしきものではありません。今この世界には6900位の言語が存在すると言われます。同じ国でも先に話したようにいくつもの言語があります。

たとえば、インドには200以上の言語と1600以上の方言があると言われます。現在、インドの憲法では22の言語を公用語として認定していると言います。確かに、聞いている私たちに分からなくてもそこに住みそのことばを使っている人たちは意味が分かっています。だから、コミュニケーションが取れるのです。取れなければ「異国人」です。ですからパウロは「異言とはことばだ」と言うのです。フィリピンのタガログ語のメッセージを聞いてもタガログ語がわからない私たちには全く何のことか分かりません。ですから、異言で語ったとしてもそれを聞いている人の理解を得ないなら、それはいったいどのような益をもたらすのか？と、パウロはそのことを繰り返して言うのです。

神が働いたときにどんなことが為されたのか？皆さん、思い出してください。イエスは昇天されるときに「聖霊があなたがたの上に下るのを待ちなさい」と言われました。そして、10日経ったときに、確かに聖霊は信者たちの上に下りました。そのときに何が起こったのか？聖霊に満たされた人たちはそのことを異言を語るということで証明したのです。実は、そのときに大変興味深いことが起こっているのです。使徒の働き2章を開いてください。人々はエルサレムに集まっていた。2:6-10「6 この物音が起こると、大ぜいの人々が集まって来た。彼らは、それぞれ自分の国ことばで弟子たちが話すのを聞いて、驚きあきれてしまった。」と、彼らは異言で語っているのです。でも、意味が全く分からないのではなく、彼らが気付いたことは「それぞれ自分の国のことばで弟子たちが」話していることでした。この「弟子たち」とは恐らく12使徒のことでしょう。「7 彼らは驚き怪しんで言った。「どうでしょう。いま話しているこの人たちは、みなガリラヤの人ではありませんか。8 それなのに、私たちめいめいの国の国語で話すのを聞くとは、いったいどうしたことでしょう。」と、ですから、このペンテコステのときに多くの人たちが「自分の国のことばで」弟子たちが話しているのを聞いて大変な驚きを覚えたのです。

いろいろな人たちのことが書かれています。「9 私たちは、パルテヤ人、メジャヤ人、エラム人、」これは昔のペルシャ、今のイランです。「またメソポタミヤ、」これは現在の「イラク」です。次に「ユダヤ、」、「カパドキヤ、ポントとアジャヤ、10 フルギヤとパンフリヤ、」、これはすべて現在のトルコです。「エジプトとクレネに近いリビヤ地方などに住む者たち、」アフリカです。「また滞在中のローマ人たちで、」と、このように様々なところから人々はエルサレムに集まっていたのです。そして、聖霊を受けた弟子たちが自分たちの国のことばを語るのを聞いて驚いたのです。ですから、異言は訳の分からないことばではないのです。存在していない言語で何か特別な神秘的なことばだと、残念ながら、聖書はそんなことは教えていません。明らかにこれは外国語なのです。

12節には「あなたがたの場合も同様です。あなたがたは御霊の賜物を熱心に求めているのですから、教会の徳を高めるために、それが豊かに与えられるよう、熱心に求めなさい。」と書かれています。コリントの教会は確かに霊的賜物を熱心に求める人たちでした。関心が強かったのです。もちろん、私たちも関心を持つことは大切なことです。どんな賜物が私に与えられたのかと、大切です。でも、賜物を知ったから教会に仕えるようになったのではないということです。たとえ、賜物を知らなくても私たちは「仕える」者です。なぜなら、私たちクリスチャンというのは「仕える者」として生まれ変わったからです。

そこでパウロはコリント教会に対して、霊的賜物を熱心に求めることはすばらしいが、求めるなら「教会の徳を高める」という霊的賜物の目的を忘れてはいけないと言います。残念ながら、コリント教会がパウロからこのような指摘を繰り返して受けているということは、この目的を忘れてしまって個人の徳を考えてしまう傾向にあったと見受けられます。ですから、教会の徳を高めるために、それが豊かに与えられることを熱心に求めなさいと、改めてパウロはこの目的を教えるのです。

2. 解き明かしの必要性 13-19節

異言が語られたなら絶対に解き明かしが必要であること、教会の徳を高めるためには「解き明かし」が不可欠であることを教え、そこでパウロは話し手についての教えを与えます。

1) 異言の解き明かしの重要さ 13節

13節「こういうわけですから、異言を語る者は、それを解き明かすことができるように祈りなさい。」と、解き明かしが必要だと言います。また、解き明かす人がいなければ自分自身が解き明かしの賜物を得るよう求めることが必要だ、だれかにやってもらうか自分でやるのかのどちらかだと言います。でも、異言で語る人にはそれを解き明かすことが出来るように解き明かす人が必要だということです。

2) 知性の重要さ 14-19節

その上でパウロは14節から「知性の重要さ」について教えます。14節「もし私が異言で祈るなら、私の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。」、異言で祈った場合、「自分の霊は祈るが、私の知性は実を結ばないのです。」と言います。「知性」ということばが出ています。ここの「霊」はすでに見たように聖霊ではなく「人間の霊」です。ですから、異言で祈っている人は確かにその人の内側から出て来るもので祈っているのです。でも、肝心なことは「知性」だとパウロは言います。というのは、たとえ心から祈っているとしてもそれを聞いている人が理解できなければ意味がないからです。

そこでパウロはどうすれば良いのかを教えています。15節「ではどうすればよいのでしょうか。私は霊において祈り、また知性においても祈りましょう。霊において賛美し、また知性においても賛美しましょう。」と。その上で16節「そうでないと、あなたが霊において祝福しても、異言を知らない人々の座席に着いている人は、あなたの言っていることがわからないのですから、あなたの感謝について、どうしてアーメンと言えるでしょう。」と言います。私は霊において祈るだけでなく知性においても祈る、霊において賛美するだけでなく知性においても賛美しようと、敢えて、「知性」ということばを加えることによって聞いている人たちが、それが祈りであっても賛美であっても、そして、祝福を与えることであっても、異言だけなら意味が分からない人に何のプラスにもならない、どうして彼らはあなたの言っていることに対して「アーメン」と言えるのか？だれも分かっていない。だからパウロは「私は知性において祈り、知性において賛美し、知性において祝福を与え感謝をしよう」と教えたのです。

そして、その上で再び「他の人の徳を高める」のでなければ異言の働きが虚しいことを教えています。異言で語っても人々が理解しなければ全く虚しい。だから、あなたが異言で祈ろうと賛美しようと、祝福を与えようと感謝をしようと、聞いている人が分からないならそれは全く虚しいものだということをパウロは言うのです。人々の徳を高めるものでなければ虚しいということです。17節に「あなたの感謝は結構ですが、他の人の徳を高めることはできません。」とあります。あなたが異言を語ることは構わないけれど、あなたが覚えなければいけないことは「それは周りの人の徳を高めるものではない」ということだと言うのです。だから、御霊の賜物が与えられた目的を果たしていないということです。自分は満足しているかもしれないけれど…と。

ですから、「異言よりも知性が大切である」と語って来たパウロは、自分の例を挙げて「知性」の大切さについて教えています。18-19節「:18私は、あなたがたのだれよりも多くの異言を話すことを神に感謝していますが、:19教会では、異言で一万語話すよりは、ほかの人を教えるために、私の知性を用いて五つのことばを話したいのです。」と、パウロが言っていることは、

***パウロは他のどの人よりも異言で話した。つまり、外国語を話した。**

彼は、もし異言で、つまり、外国語、人々が聞いていても分からないことばで一万語話しても、聞いた人が理解できなければそれは全く虚しい。それなら、彼らが理解できるように知性を使ってたった五つのことばであってもそちらを選択すると言うのです。聞いている人たちが分かる五つのことばで話したほうが彼らにとって益になると言うのです。あくまで、私たちに与えられている賜物は「人々の益のために用いるもの」です。だから、私たち信仰者は私たちの隣人のために生きているのです。彼らの成長のために生きているのです。どうすれば彼らの成長を助けることができるか、どうすれば彼らを励ますことができるかと。

C. 異言と預言の働き 20-25節

20-25節でパウロは異言と預言それぞれの働きについて教えています。20節「兄弟たち。物の考え方において子どもであってはなりません。悪事においては幼子でありなさい。しかし考え方においてはおとなになりなさい。」、パウロはコリント教会が物の考え方において「おとな」になることを願っていました。つまり、正しい判断ができる人です。普通、おとなはそうです。子どもたちはよく分からないから間違った選択をします。本来ならおとなは正しい選択ができる者たちです。だからパウロは、コリント教会の人たちが信仰者としておとなになることを願っていたのです。でも、みことばを見ていて分かることは、悲しいことにこの教会は異言も含めて御霊の賜物について大変幼稚だったということです。

パウロから教えられていたにも関わらず、残念ながら、理解していない大変幼稚な者だったのです。霊的賜物が与えられた目的は「兄弟姉妹たちの霊的成長のため」でした。何度も私たちはみことばを通して見て来ました。悲しいことに、コリント教会の人たちはそのことが分かっていなかったのです。ですから、おとなになるように、ただし、「悪事においては幼子でありなさい。」と言います。悪に関しては幼子のように生きていきなさいということです。いろいろな悪に染まっていない幼子たち、罪がないわけではありません。罪はありますが悪から離れて生きているように、私たちもそのように生きていきなさい、そのように行動していきなさいとパウロは命じるのです。しかし、考え方においてはおとなになりなさいと言います。「幼子でありなさい。」も「おとなになりなさい。」のどちらも現在形の命令です。

再びパウロはここで神の前に正しい判断ができるおとなになることを願うのです。

そして最後に、パウロは再び預言が異言に優っていることを教えています。

1) 異言と預言の目的 21-22節

まず、それぞれの目的について21-22節で教えます。21-22節「:21 律法にこう書いてあります。「『わたしは、異なった舌により、異国の人のくちびるによってこの民に語るが、彼らはなおわたしの言うことを聞き入れない』と主は言われる。」:22 それで、異言は信者のためのしるしではなく、不信者のためのしるしです。けれども、預言は不信者でなく、信者のためのしるしです。」、21節には旧約聖書の引用がされています。イザヤ書28:11-12の引用です。11節「まことに主は、もつれた舌で、外国のことばで、この民に語られる。」と書かれています。それをパウロはここに引用したのです。イザヤ書ですから預言者イザヤがイスラエルの民に語ったのです。「罪を悔い改めなさい」というメッセージです。悔い改めなければ神のさばきがあると警告したのです。しかし、それを聞いてもイスラエルの人たちは悔い改めようとしなかった。

そこでイザヤは神のメッセージを語るのです。「あなたがたは外国人のくちびるによってさばきが来るといメッセージを聞く」と。パウロが言ったことは、アッシリヤによってイスラエルにさばきをもたらされると警告したのです。実際に、彼らがやって来た時、自分たちが使うことばではないことばを使います。イザヤは語ったのです。悔い改めるなら12節「主は、彼らに「ここにいこいがある。疲れた者をいこわせよ。ここに休みがある」と仰せられたのに、…」、でも「彼らは聞こうとはしなかった。」と、だから、今度は私ではなく外国の人たちのことばによって警告が発せられると言います。それにも耳を貸そうとしなかったイスラエルの民は、その結果、さばきを受けるのです。

ですからパウロは言います。「異言は信者のためのしるしではなく、不信者のためのしるしです。」と。なぜなら、イスラエルの民は残念ながら神を信じていなかったからです。だから、神は罪を犯す彼らに警告を発したのです。イザヤを通して、そして、外国の口を通して…。でも、彼らは悔い改めなかった。だから、異言は神を知らない者たちのためのしるしだと言います。

でも、預言はどうか？預言はそうではない。信者のためのしるしだと言います。なぜなら、預言は聞く信者の霊的成長をもたらすからです。

2) 異言と預言の効果 23-25節

・異言 23節 : 23節「ですから、もし教会全体が一か所に集まって、みなが異言を話すとしたら、初心の者とか信者でない者とかが入って来たとき、彼らはあなたがたを、気が狂っていると言わないでしょうか。」と、もし教会に入ってきてみな訳の分からないことばでしゃべっているとすれば、この人たちは気が変だと思わないだろうか？と言うのです。

・預言 24、25節 : 24-25節「:24 しかし、もしみなが預言をするなら、信者でない者や初心の者が入って来たとき、その人はみなによって罪を示されます。みなにさばかれ、:25 心の秘密があらわにされます。そうして、神が確かにあなたがたの中におられると言って、ひれ伏して神を拜むでしょう。」と。教会の中に「信者でない者や初心の者が入って」来るとパウロは言います。「初心の者」とはよく学んでいない人のことです。霊的賜物について熟知していない人です。また同時に、まだ救いに与っていない人が入って来てみな異言でしゃべっていたら、先に見たように「この人たちは変だ」と思う。もし、異言ではなく神の真理である預言が語られているなら、同じような人が入って来た時「みなによって罪を示されます。」と書かれています。神の真理がどのような働きをするのか？それを聞いた者たちの心に罪が示されていくということです。神はそのような働きをされます。ヨハネ16:8「その方が来ると、罪について、義について、さばきについて、世にその誤りを認めさせます。」と、聖霊はそのような働きをするのです。

ですから、神のみことばを聞いている人たちのうちに神が働くならその人たちの罪を明らかにするのです。「みなにさばかれ、」と続きます。みな語るメッセージによって自分はさばかれる存在だということを悟られるということです。なぜなら、「心の秘密があらわにされ」るからです。メッセージを聞いているとまさにそれは自分のことが言われているように思います。私たちはみな経験したことがあると思います。自分の心の秘密、その真実が明らかに示されることによって「こんなに汚れた私は神のさばきを受ける罪人なのだ」とそのことに気付かされるのです。

「そうして、神が確かにあなたがたの中におられると言って、」、つまり、そのことを明らかにした人たちに対して、この人たちは神によって用いられている、神がこの人たちのうちにおられると、そして、「ひれ伏して神を拜むでしょう。」と言います。この方を信じて心からこの救いを受け入れようとする、このような働きが為されると言うのです。異言は「この人たちはおかしくなっている」という結果をもたらす、預言は神のみことばを通して罪が示され救いへと導かれるのです。だから、預言が異言よりもはるかに優れているとパウロは教えたのです。

さて、これがコリント教会に送ったメッセージです。私たちが学ぶべきことは賜物に関係なく神の真

理を語り続けることです。どんなときにも見て来たように神の真理を語る者であることです。神の真理を示し続けていくのです。どのように？神の真理を語るだけでなく、神の真理によって変えられたということを明らかにするのです。なぜなら、救いはそうです。神の救いは知識を蓄えることではない。救いは神によって変えられた人生、それが救われたことを証明するのです。神の救いは私たちを新しく生まれ変わらせてくれる。だから、それを示すのです。私たちは神のみことばを愛する者として、みことばによって互いの徳を高め合うことです。神のことばによって信仰の成長を図り合うことです。

また、ときにはみことばをもって勧めを為したり、励ましを与えたり慰めを与えたり、その罪を責めることが出て来るかもしれません。でも、兄弟姉妹が集まったらみことばをもって励まし合いながら主を愛する者として成長していこうと、そのような群れであることが必要です。

悲しいことに、コリント教会はそうではなかった。だから、パウロはそのような群れであることを願いながらこの大切なメッセージを与えたのです。だれのために生きているのか？しっかり覚えることです。何のために生きているのか？それを覚えるだけでなく実践することです。あなたが兄弟姉妹にとって大きな祝福をなることを心から願っています。そのように歩んでください